

# 伝統的様式を継承した現代の町家におけるファサードの発展過程 —飛騨古川の「新町家」に着目して—

正会員      〇村西 真一\*  
同          小柳 健\*\*  
同          岡崎 篤行\*\*\*

伝統的様式      町家      飛騨古川  
ファサード      継承      類型化

## 1 研究の背景と目的

岐阜県飛騨市古川は、景観に関する特別な条例が制定されていないにもかかわらず、地域の伝統的様式を継承した町家が現在でも発展、普及を続けているという全国的にも稀有な地域であり、国土交通省の「美しいまちなみ大賞」も受賞している。

この地域では地域の伝統的様式を継承し、昭和30年頃から建設された町家のことを新町家と呼んでおり、その新町家が現在の古川の町並みの中核を担っている。近年、初期に建てられた新町家が建て替えの時期にさしかかっている。しかし、先行研究<sup>1) 2)</sup>により新町家のファサードの大きな発展過程は明らかにされているものの、未だ具体的な年代や細かな変遷までは明らかにされていない。

そこで本研究では飛騨古川の新町家に着目し、ファサードの発展過程を明らかにすることを目的とする。

## 2 研究方法

飛騨古川の駅前景観形成地区及び、歴史的景観地区の一部を対象に新町家の①外部意匠の調査を行う。次に②各町家の住人等へのヒアリング、行政資料の閲覧等により建築年代を明らかにする。③以上の結果を分析することで新町家の類型化を行い、さらに類型化されたものについての考察を行う。調査の結果、対象となる359棟中242棟の建築年代が判明した。しかし建築年代判定の精度が低い、修景されている等、類型化が困難なものもあり、最終的には107棟の新町家で類型化を行った。

## 3 新町家の類型化(表1)

新町家をファサードと建築年代に着目して類型化を行った結果、6種類の基本様式を抽出することが出来た。

### (1) type 1 「新町家移行型」

このタイプは伝統的様式を多く継承しており、ファサードの細部については伝統町家と比較してもあまり大きな変化は見られない。しかし、軒の低いつし二階から軒の高い本二階へと軒高が変化している。

### (2) type 2 「初期新町家型」

このタイプは初期の新町家にあたり、ファサードは簡素で、type1と比較すると伝統的様式はあまり継承されていない。軒高はさらに高くなり、壁面も多くなっている。また、腰壁も多くの町家で用いられている。







### (3) type 3 「新意匠発生型」

このタイプでは伝統町家には見られない「雲」と呼ばれる唐草模様のついた肘木が軒に付加されるようになる。このタイプ以降、雲が古川の町家の大きな特徴となり、その雲が付加された町家が主流となっていく。

### (4) type 4 「新町家准基本型」

このタイプは類型化された各タイプの中で最も棟数が多く、掃出し窓や格子等、type2やtype3と比較するとより伝統町家に近づいている。一方で外壁色の多様化や伝統町家にはない二重垂木や霧除け庇を付加したものが増加し、装飾性の高いものも多くなっている。このタイプ以降、86年に制定された「景観デザイン賞」の受賞基準を満たすものが増加している。

表1 新町家の類型

基本様式						
軒	腕木庇+肘木		腕木庇+雲			
庇	腕木庇		腕木庇+雲			
外壁材	漆喰		じゅらく			
外壁色	白色		多様			
腰壁	なし	洗い出し	タイル	洗い出し	下見板	
一階開口部	出格子	普通窓	出窓	掃出し窓	出格子	
二階開口部	普通窓		出窓		出窓+格子	
その他	飾り窓	—	—	—	—	—

Developing process of frontage in contemporary MACHIYA succeeding traditional style  
—A case of “SHINMACHIYA” in Hida-Furukawa—

MURANISHI Shinichi  
OYANAGI Takeshi  
OKAZAKI Atsuyuki

## (5)type 5「新町家基本型」

このタイプは1階開口部が出格子となる等、type 4に比べより伝統的様式を増したもので、多くの町家の開口部に格子が見られる。新町家のデザインガイドラインにおいて目標建築物像として推奨されているのもこのタイプであり、新町家の基本型と言えるものである。

## (6)type 6「新町家回帰型」

このタイプは底に伝統的様式の箱底が付加されたものや雲のないもの、二重垂木や霧除け底の減少等、type 4、5に比べ簡素であり、伝統町家への回帰が見られる。

## 4 新町家と雲の変遷

### 4-1 新町家の変遷 (表 2)

伝統町家の後、伝統的様式を多く継承している type1 が建てられた。1930 年代後半になると、1904 年の古川大火後に建てられた町家の建て替えの時期となる。その時期に建てられ始めた type2 は、伝統的様式も少なく簡素なものであった。60 年代になると type2 と平行して、軒に雲が付加された type3 が建てられた。70 年代後半からは type4 が増え始め主流となるが、中には装飾性の高いものも多く見られるようになる。80 年代以降になると type 4 に加え、より伝統的で新町家の基本型となる type5 や、伝統町家への回帰が見られる type6 が建ち始め、様々なタイプの新町家が見られるようになった。

### 4-2 雲(肘木)の変遷 (表 3) (表 4)

雲の変遷を新町家の各タイプとの関係から見てみると、type1 には雲-I が付加されている。Type2 では雲-I より簡素な雲-II が見られる一方で、一部が面取りされた雲-III も見られる。type3 で見られる雲は雲-IV、V が多く側面の模様が比較的簡素なものが主流だが、type4 ではより装飾性の高い雲-VI が大半を占めている。その後、type5 では雲-V、VI がほぼ同じ割合となり、type6 になると雲-V が主流となっている。

## 5 結論

本研究により新町家が 6 つのタイプに分類できることが明らかとなった。また、新町家の基本型と呼べるものが完成するまでには長い時間を要し、その基本型の他、装飾性を増していくタイプと、簡素になっていくタイプが存在している。さらに、新町家と雲の装飾の関係性について、雲、新町家同様に初め簡素だったものが徐々に装飾性を増していき、その後多様化していったという変化が見られた。

### 【参考文献】

- 1) 木野勢雄・岡崎篤行、「伝統的様式を規範とした継承型住宅のデザインと普及実態—富山県八尾町、岐阜県飛騨古川を中心に—」新潟大学大学院自然科学研究科修士論文 2004
- 2) 佐野雄二・岡崎篤行・高見沢邦郎、「歴史性を継承した新たな町並み景観の形成と計画的課題—岐阜県古川町の歴史的市街地を対象として—」日本建築学会計画系論文集, No531, 2000

表 2 新町家の各タイプの年代別建築数

新町家の基本様式	type 1	type 2	type 3	type 4	type 5	type 6	変遷
1930	1						
1940							
1950		1					
1960		1	1	1			簡素
1970		3	2	4			
1980			3	3			装飾性高
1990			1	15	1	3	
2000				9	2	5	多様化
合計	3	5	10	59	13	17	107

凡例 ■: 各タイプで特に建築数の多い年代

表 3 雲の類型







	雲-I ・肘木の下面が曲面となっているもの。 ・伝統町家に付加されている肘木の多くはこのタイプであり、伝統的意匠ともいえるものである。
	雲-II ・肘木に特に装飾を施していないもの。 ・このタイプでは、腕木にも装飾を施していないものもあり、非常に簡素なタイプである。
	雲-III ・肘木の一部が面取りされたもの。 ・面取りの方法は直線のもの、曲線になっているものがある。 ・密蔽にはこのタイプまでは雲ではない。
	雲-IV ・側面の唐草模様無く、雲-IV以降で最も簡素なタイプの雲。 ・密蔽には雲と呼べるのはこのタイプ以降のものである。
	雲-V ・側面の唐草模様は見られるが、比較的簡素な模様のもの。 ・具体的には、線 2 本以下で模様が構成されているもの。
	雲-VI ・雲-Vよりも側面の模様が複雑で、装飾性が高くなったもの。 ・具体的には、線 3 本以上で模様が構成されているもの。

表 4 新町家と雲の関係性

新町家の基本様式	type 1	type 2	type 3	type 4	type 5	type 6
雲-I	2	1				1
雲-II		2				3
雲-III		2				3
雲-IV			1	11	2	
雲-V			1	15	5	7
雲-VI			2	33	6	3
合計	2	5	10	59	13	17

凡例 ■: 各タイプで特に多い雲のタイプ

\*新潟大学大学院自然科学研究科 博士前期課程

\*\*関ヒューマンネット 修士 (工学)

\*\*\*新潟大学工学部建設学科 准教授・博士 (工学)

\*Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ.

\*\*Regional Planning Office by Human Net., M.eng

\*\*\*Assoc.Prof., Dept. of Civil and Architecture, Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr.Eng